

自由間接話法の認知プロセス

マンガ学を手掛かりに(後)

出原健一

Ken-ichi Idehara

滋賀大学 経済学部 / 准教授

前稿「自由間接話法の認知プロセス—マンガ学を手掛かりに—(前)」¹⁾では英語の自由間接話法の、少なくともプロトタイプでは、マンガにおける同一化技法と同様、共同注意が成立していることを示した。本稿はこの点を念頭に置いた上で、「視点」の観点から自由間接話法を考察することで、言語分析における新たな視点を提案することを目的とする。

はじめに、認知言語学における視点論を紹介することで、従来の枠組みでは自由間接話法を適切に分析することが困難であることを示す(第8章)。その後、日本語の自由間接話法について優れた分析を行っている橋本(2014)を参照しながら、日英の自由間接話法の共通点と相違点を明らかにした上で、マンガ学で論じられている「視点」が自由間接話法の分析に有効であることを論じる(第9章)。最後に、マンガ学の視点概念を他の言語現象に活用できる可能性を指摘し、今後の展望を述べる(第10章)。

VIII 認知言語学における視点論の検討

「視点」は言語学において重要なキーワードの1つであり、関連する先行研究は膨大にあるが、ここでは池上(2011,2015)と中村(2004)を出発点として「視点」について考えてみたい。

池上(2011)は、話し手がある事態をどのようなスタンスから言語化するかということについて、以下の2つの事態把握の仕方を提示している。

1)『滋賀大学経済学部研究年報』第23巻pp.19–36。

＜主観的把握＞：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

＜客観的把握＞：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま) 自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に(自己の分身を含む) 事態を把握する。(同上:52)

少々乱暴だが、一言で言えば、前者は話し手の「見え」をそのまま言語化し、後者は鳥瞰的に事態を言語化するということになる。さらに、言語において好まれる事態把握の仕方として、日本語は主観的把握が、英語は客観的把握が好まれるとし、(24) の例を挙げている。

- (24) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成『雪国』)²⁾
b. The train came out of the long tunnel into the snow country. (汽車ハ長イトンネルカラ出テ雪国ヘ入ッテキタ)
(E.Seidensticker訳) (同上:55)

(24a) では汽車に乗っている登場人物の視点から表現されているので主観的把握と言える。それに對し、英語訳の(24b) では原文には表現されていない“train” が言語化され、俯瞰的な表現形式をとっているため、客観的把握ということになる。し

たがって、ここで言う「主観的」「客観的」という言葉は、原則的には視点の位置、つまり「どこから見ているか」を区別するために用いられていることに注意する必要がある³⁾。そのため、主観的把握では「認知の主体として特徴的に自己中心的に事態把握をする話者にとっては、自身は自らの＜見え＞に入らない(従って、＜ゼロ＞として言語化される)」(同上:53) ということになるわけである。

以上の議論は非常に説得力があり、異論をはさむ余地はなさそうに見えるが、後に関連するので、ここで少し反論を試みておきたい⁴⁾。(24a) で考えてみよう。ここで語り手は、登場人物が実際に見えているものを「すべて」言語化しているわけではない。実際には汽車の車内や窓は「見えて」いるはずである。しかしそれは言語化されていない。このような反論は多くの認知言語学者から再反論されるだろう。「見えるものすべてを言語化する必要はない。焦点の当たっているものだけを言語化すればよいのだ」と。それには筆者も同意する。しかし、それならば、実際には視界に入っていないものであっても、視界に入っているとみなして言語化することがあってもよいのではないだろうか。認知言語学はいわゆる客観性のみに執着する従来の言語学に反旗を翻し、人間の認識・解釈に重きを置いている。ならば、「客観的」に視野に入っていないもの、例えば「見ている私」が視野に入っている、それを当事者の「見え」と判断してもよい場合があるのではないだろうか。もしそういう視点があるとすれば、純粹に主観的把握とも客観的把握ともみなしにくい視点が存在することになる。この疑問が妥当なものであるかどうかはマンガ学の視点論を紹介する際にまた触れることにし、ここでは問題提起をするだけにとどめておく。

2) 参考文献の中で提示された事例の原典の提示の仕方は前稿を踏襲する。

3) 池上(同上) では、「主客合一」と「主客対立」という哲学用語を用いて説明している。

4) この反論は泉信行氏のホームページ上の論稿「漫画批評における、視点をめぐる諸問題1〜3」を大いに参考している。

池上と同様、視点に関わる問題を理論化している研究として中村(2004)がある。ただし中村は視点というよりインタラクションの側面に重きを置いた定義を行っており⁵⁾、状況密着的な認知モードをIモード(Interactional mode of cognition)と、そして仮想として持つ状況外からの認知モードをDモード(Displaced mode of cognition)と呼んでいる。定義の仕方は異なるが、基本的にIモードは主観的把握に、Dモードは客観的把握に当たると言ってよいだろう。中村(同上)では言語類型論的にIモードとDモードの言語現象での現れ方について詳細に論じているが、その中で話法については、「直接話法の方が、ナマの発話に近く、Iモードの反映と言える」(同上:42)と述べ、間接話法についてはDモードであると示唆している。

それでは本稿の主題である自由間接話法はどのように位置付けられればよいだろうか。池上も中村も両概念を二分法的なものではなく段階的なものとして提示している⁶⁾ので、中間的事例であると説明することはもちろん可能である。しかし、その「中間的」というのはどういう状態なのかは説明する余地が残されており、それをマンガ学の知見を参考にして明らかにし、言語学における視点論の拡充を目指すのが本稿の目的である。

IX 自由間接話法の視点

本章ではまず日本語の自由間接話法について共同注意の観点から検討し、英語との違いを明らかにする(9.1)。それに基づき、自由間接話法の分析に必要と考えられる視点をマンガ学の視点論から援用し、分析を試みる(9.2)。そして最後に補足として、日本語のマンガやライトノベルで多用され

るルビが英語の自由間接話法に近いふるまいをすることがあることを指摘する(9.3)。

9.1 日本語の自由間接話法

よく言われているように、日本語はそもそも直接話法と間接話法を形式的に区別する手段を持っていない。

残念ながら、簡略で分かりやすい形式的特徴のみをもとに日本語話法の体系を読み取ることはできない。日本語の話法は、英語の直接話法と間接話法のように明確な形式的対立を持たないし、また、伝達節の有無という単純な対立で節結合のオプションを区別できないからである。(山口2009:137)

したがって、英語の自由間接話法の特徴の1つであり、「最大の謎」とされた(8e)「近接を表す直示表現が過去形と共起できる」が、日本語では明確に文法化されていない。

したがって形式的には英語と対照分析することはできないが、同様の機能を果たしていると考えられる言語現象は日本語にも存在する。物語の語り・話法について英語・日本語・中国語を中心に分析を試みたものとして橋本(2014)がある。この大著の全体の議論を検討する余裕はないので、本稿に関係する点のみ紹介する。

橋本は自由間接話法について、「物語では語りが人物に成り代わって語る」(同上:348)ものとして捉え、通常の地の文や間接話法との違いとして、「登場人物の言葉を模倣すると、物語現在に入り込んでいるように感じられる」(同上:349)と述べている。そしてその入り込み度は一様ではないこと

5) 池上もインタラクションを軽視しているわけではなく、「参与」という言葉を用いて、中村と同趣旨のことを述べている。例えば池上(同上:52-53)を参照。

6) 池上(同上:51)、中村(同上:33)を参照。

を認めつつも、先に紹介した池上や中村を参照した上で、「英語などでは基本的に物語世界を客体化し、距離を取って叙述するのに対し、日本語では物語現在内（物語世界の「いま・ここ」）の人物に同化した語りに容易に移行してしまう」（同上:385）現象を「オーバーラップした語り」（同上:394）と呼んでいる。「オーバーラップ」であるので、「語りが登場人物に重なってはいるが、依然として別々の主体としてあり、完全に同化しているわけではない」（同上:394）わけである。「オーバーラップした語り」が完全に「自由間接話法」と一致するというわけではないが、日本語的な傾向として、これを中心に、（前）で扱った共同注意及び（19）に示したプロトタイプ的な表現手法が日本語でも当てはまっているか検討しよう。

日本語の例を見ていると、（19）に当てはまらない例は英語に比べ多く存在するようである。例えば、（24a）⁷⁾のように、物語の冒頭から登場人物の視点で語られる場合、当然（19）が示す“cues”は存在しない。8章でも見たように、日本語は主観的把握を好む傾向があるため、英語に比べて、明示的な“cues”がなくとも、容易に「オーバーラップ」させることが可能なのだろう。しかし、あくまで「英語に比べ」ということであって、橋本が用いている例を見ても、（19）の傾向はよく見られる。1つだけ例を挙げよう。

（25）ふかえりの居場所を発見したことを「さきがけ」の連中に教えるべきかどうか、牛河は頭の中で素早く計算をした。その判断はむずかしい。今ここでふかえりを差し出せば、それなりに点数は稼げるかもしれない。

（同上:395、ただし後半を省略）⁸⁾

（25）では下線部が「オーバーラップした語り」であるが、その直前にある「頭の中で素早く計算をした」は判断表現と言えるだろう。

さらに、橋本は「知覚動詞がある場合、日本語ではその人物の視点に同化した語りになりやすい」（同上:415）と述べ、知覚動詞に導かれて、登場人物の視点が描かれやすいことを指摘している。ただしこれは、欧米文学からの日本語への翻訳を中心に論じている箇所であるので、（19）が正しいのであれば当然と言えるのだが、例えば、日本語文学の中でも特に作品世界内に読者を引き込ませる工夫がなされていると言われている⁹⁾ ライトノベルというジャンルにおいても、（19）の傾向は維持されているように思われる。（26）は平坂読『妹さえいればいい』第5巻（Kindle版）からの引用である（ただし、下線は出原）。

（26） a. そこで女は違和感に気づく。静かすぎる。
（位置27）

b. 「はあ ……美味しい」
素直な言葉が思わず口をついて出た。
最近気づいたが、自分はかなりお酒が好きで、しかも強いほうらしい。
（位置617）

c. 愕然とする京。
自分がうっかり宅配便をペンネームで送ってしまったせいで、蚕に迷惑をかけたしまったなんて。（位置1384）

下線部がそれぞれ「オーバーラップした語り」であるが、その直前の「気づく」「口をついて出た」「愕然とする」はそれぞれ知覚表現、行為表現¹⁰⁾、判断表現と言ってよいだろう。日本語では、例えば（26b）

7) （24a）自体は自由間接話法と言えないかもしれないが、冒頭から登場人物視点で始まる例は日本の小説には少なくない。橋本（2014:387）も、池上が提示した幸田文『流れる』の冒頭箇所を取り上げ、同趣旨のことを述べている。

8) 村上春樹『1Q84』より。

9) メイナード（2012）を参照。

10) 厳密には、「口をついて出た」は「知覚するための行為」とは言えないが、ここではその行為によって、以下の思考が引き出されたと解釈し、広義の行為表現とみなす。

の場合、行為表現を含む文を省略したとしても自然な文章となり、その意味で、英語と比べ、“cues”がなくとも自由間接話法を用いることも可能であるが、“cues”を用いる方が分かりやすく、また一般的と言っても差し支えないだろう。(前)で述べたように、(19)は恣意的な記述ではなく、人間の自然な認知プロセスの反映である以上、たとえ明示的に“cues”が表現されていなくても、特定の登場人物に注目が当たっていれば、共同注意のプロセスにより「オーバーラップの語り」が可能になると考えられる。

日本語では(19)以外にどのような“cues”があるのか、あるいはないのかを今後さらに検証する必要があるが、以上の議論により、日本語においても自由間接話法に共同注意が関与していると判断する。

9.2 自由間接話法の視点

9.2.1 序—自由間接話法の視点

これまでの議論を踏まえ、自由間接話法に関わる視点について考察していこう。

(10)によれば自由間接話法は、語り手の誘導によって読者はまず特定の登場人物に焦点を当てる。そして次に、その人物の思考に(疑似的に)その登場人物とともに注目する。この際、最初の段階、つまり言語表現では“cues”に当たる箇所は視点的に客観的把握としてよいだろう。そして、中村(2004)の言うように、もしその後直接話法が来れば主観的把握¹¹⁾、間接話法が来れば客観的把握とするのも問題なかろう。これらの場合、間接話法はもちろんのこと、直接話法であっても、登場人物との(疑似的)共同注意は起こりにくい。なぜなら、小説というコンテキストなので登場人物の思考を

「事実として」読者が「見られる」だけであって、直接話法であっても、特に客観的把握を好む英語では、それは現実世界であればただの「発話」を直接聞いたのと同様に解釈できてしまうからである。つまり、登場人物の視点は関係しないのである。

では、自由間接話法はどうであろうか。直接話法・間接話法と異なるのは、登場人物の視点が関わる点である。特に英語の場合、「文法的直示表現は語り手の視点を反映するかたちで元発話の形式から推移するのに対し、語彙的直示表現は登場人物の視点を反映した表現がそのまま維持され」(山口2009:92) するという「二重の視点」問題があるが、これはどのような視点に基づくと考えればよいだろうか。

実はマンガ学では、この「二重の視点」に似た視点がすでに提案されている。それを次に考えてみよう。

9.2.2 身体離脱ショット

図5は少し説明が要る。上のコマの右側に見える後頭部は右下のコマの女子のものである。そしてこの女子は、自分のことに関して他人が好意的に考えたことを文字として視認できる、という特殊な設定がある。したがって上のコマの男子の横にある文字は原則この女子にしか見えないものである。それを踏まえて、図5の上のコマを考えよう。一見すると、女子の後頭部が入り込んでいるので客観的把握のように思えるが、上で述べたように、この「見え」はこの女子だけに可能なものである。実は図5は泉(2008a)¹²⁾によって分析されている例であるが、このような視点を「身体離脱ショット」(同上:42)と呼んでいる。泉は、「視点の数はひとつのコマにつき一種類、ということはありません。二種

11) この「主観的把握」は語り手・読者からの視点であることに注意。

12) 泉信行氏は「イズミノウユキ」という別名義も使われているが、混乱を避けるため、本稿では本名で統一させていただいた。

類以上の別の視点が同時に重ね合わせられたり、溶け合ったりもする」(同上:33)というマンガの特徴から、「視点と視界はイコールではない」(同上:41)と論ずる。その1つの例として、「構図そのものは客観ショットのようでも、視点はキャラクターの意識に寄り添って「主観化」されている」(同上:41)身体離脱ショットが挙げられている。

このような視点は実はマンガだけの手法ではないこともよく指摘されている。

(27)

夏目:(前略)マンガでよくある、手前に人物がいて、その人が見ている画面がその向こうにあるという手法。これは効果としては同一化技法になるわけです。

泉:映画で言うオーバー・ザ・ショルダー・ショット(OTS)ですね。



図5 (小林尽『School Rumble』第8巻p.136)

夏目:そのマンガにおける使用を泉くんは「身体離脱(=アウト・オブ・ボディout of body)」と言うわけだけど、このネーミングは僕はいいと思いますね。

泉:認知学者の宮崎清孝さんという人が背後霊的視点という言葉を使ってたらしいんですけど、(以下略) (夏目、宮本、泉2008:58)

(27)の短い引用の中で多くのことが示唆されている。1つは、このような視点は映画でも以前から用いられている手法であるということ¹³⁾。2つ目に、心理学においても論じられているということ。(27)にも出てくる宮崎(1994:170)では、「背後霊的視点ヴァージョンの方が第3者の視点ヴァージョンに比べ絵本内容についての想像がすすみ、読者が登場人物の立場によりたやすい」とし、1人称視点においては、「それがある主体、人間によって見られているものであることを示す手がかりが映像中になく、映像を見る者がそれを失念しがちなことにある」という特徴を挙げている。このように他の分野ではすでに考察されている視点であるが、言語学においては岡本(2004)、本多(2010)、出原(2013)¹⁴⁾などの例外を除き、まだ取り上げられることは少ない。これは言語学では、視点と視界を同じものとして見なしてきたからであろう。

そして3つ目に、これが本論との関連では最も重要であるが、夏目の「効果としては同一化技法になる」という発言である。もしそうであれば、自由間接話法との関連も考えられることになる。そこで、もう少し詳細に「身体離脱ショット」について、泉の考察¹⁵⁾を紹介しよう。泉は、身体離脱ショットが登場人物の主観性に読者をより強く入り込ませる理由として、「身体感覚」を感じとることができる

¹³⁾ ここでは詳細に論じられないが、三輪(2014:第3章)に詳しい分析がある。

¹⁴⁾ 出原(2013)には、「背後霊的視点」という用語ではなく、便宜上「限定知の視点」という言葉を用いた。ただし発表内では、宮崎(1994)を引用し、「背後霊的視点」という用語も用いた。

¹⁵⁾ 以下、この段落で引用先を明示していない引用(括弧)は泉のホームページからの引用である。

から」と述べている。先の宮崎の引用にも同趣旨のことが述べられているが、1人称視点では視覚以外の感覚が読者に伝わりにくい。「人間の主観的意識（主観性）は視覚情報のみで成立してはいない。五感のもとより、常に我々は身体感覚（位置覚や運動覚、平衡覚、筋肉覚、深部覚など）を頼りにして自らの「主観性」を保っている」ため、1人称視点で見た場合、「あたかも「身体感覚がマヒした人間」か「身体感覚を持たないロボット」のよう」に感じられてしまう。その点、身体離脱ショットでは「「視覚情報」と「身体感覚情報」を同時に伝えることが可能になる」わけである。

では、この「身体感覚」¹⁶⁾は、絵で表現することのできない小説の自由間接話法において表現可能であろうか。それを考えるために、(1) や (10) を基にして、身体離脱ショットと自由間接話法の対応関係を見てみよう。身体離脱ショットで描かれている登場人物は、(前) で挙げた図2,3,4では、登場人物の「見え」のコマ（1人称視点）の直前のコマに描かれ¹⁷⁾、それを(1) では「読者の注意を特定の登場人物（およびその行為）に向けさせる」と述べた。これは(10) では「登場人物（外向的意識（extroverted consciousness））の行為・経験を表す表現」に該当する。したがって、「身体感覚」は、自由間接話法では「cues」、つまり「行為表現」「知覚表現」「判断表現」である程度表現されると言えるだろう。「行為表現」や「知覚表現」ではその身体性が、「判断表現」ではその心的状態が示される。図6を見てみよう。上の左のコマで「振り向いた」（行為表現）男子に注目を当てた後の下の右のコマは身体離脱ショットであるが、男子の肩の位置に「？」が描かれている。これはこの男子が、女子がドアから覗いているのを「不思議がっている」（判

断表現）ことを表している。このコマを置くことで、読者は、この男子の心情が分かり、その隣のコマ（男子からの1人称視点）をより男子の視点・立場から見る事が可能となっている。

このように、「絵の全体図としては「一台のカメラでは撮影することのできない」映像であり、ということは、二種類の異なる映像を合成した、一種のコラージュ表現に近い構図」¹⁸⁾である身体離脱ショットは、「二重の視点」という謎を持つ自由間接話法を考えるヒントを与えてくれると思われる。



図6（附田・佐伯『食戟のソーマ』第11巻 p.14）

16) これには顔の表情なども含まれている。

17) ただし、身体離脱ショットでもその直前に当該の登場人物の行為等を表すコマがあることも珍しくない。図6を参照。

18) 泉のホームページより。

9. 2. 3 英語の自由間接話法の視点

身体離脱ショットを踏まえて、まず英語の自由間接話法を考察しよう。

(8) や9.2.1で取り上げた山口(2009)で繰り返して述べられているように、英語の自由間接話法の最大の謎は、時制や人称が語り手の視点を取るのに対し、語彙的直示表現は登場人物の視点を取るという点である。また文の構造自体はむしろ直接話法的である(8c,d)。つまり、自由間接話法の「間接」的な箇所は時制と人称であると言ってよい。したがって、基本的には登場人物視点と考え、時制と人称の間接性を説明できれば良い。

とはいえ、物語における時制の問題は橋本(2014)で詳しく検討されているが、英語の物語では基本的になぜ過去形で語られるのかという問題は「語りの審級」の観点も関わり、本稿の紙幅では到底検討できない。しかし、ここでは、自由間接話法でも地の文と同じ時制体系が維持されていることは、語り手が読者に対して地の文と同じ視点で自由間接話法でも共同注意が行われていることを示す、と考えるにとどめておいても本論との関係では十分であると思われる。つまり、時制によって「語り手の視点」が関わっていることが明示的に示されている、ということであるが、これは自明と言ってよいだろう。

残るは人称の問題であるが、これは英語の自由間接話法を、語り手と読者の共同注意の面が色濃く出た身体離脱ショットと考えれば説明がつく。身体離脱ショットは語り手(読者)の視点と登場人物の視点が「同時に重ね合わせられ」「溶け合った」視点であるが、その登場人物自身が入り込んでいるため、それを語り手(読者)が言語化すれば3人称代名詞を使うことになるのは自然である。以

上のことから、英語の自由間接話法は以下のようにならめられる。

(28) 英語の自由間接話法の視点は、語り手(読者)視点が前景化されやすい身体離脱ショットが典型となる。

- (a) 基本的には登場人物の視点(思考)を表現するため、文の構造や語彙(的直示表現)は「実際に用いられる」まま用いられるが、
- (b) 登場人物自身も見え(視界)に入り込んでいるため、語り手と読者からの(共同注意的)視点から、登場人物も3人称で表現されやすくなる。

なぜ、英語の自由間接話法では語り手(読者)視点が前景化されやすいのかについては、「好まれる事態把握」が関係していると思われる。第8章で紹介したように、池上(2011)によれば英語母語話者は客観的把握を好む傾向があるため、たとえ“cues”があったとしても、いきなり登場人物の(1人称)視点だけに入り込み言語化することに慣れていないから、と考えられる。そのように考えれば、(9)で最後に(過去時制は維持されているものの)1人称代名詞“I”が現れたのも、それまでの自由間接話法ですでに身体離脱ショットをとっているため、その後で語り手(読者)視点がやや背景化され、登場人物の視点から代名詞を言語化しても読者にとって解釈しやすくなった、と言えるかもしれない¹⁹⁾。

9. 2. 4 日本語の自由間接話法の視点

9.1で述べたように、日本語には明確な話法体系はないが、橋本(2014)の言う「オーバーラップ

19) 図6と類似した構造になっている。つまり“cues”→「語り手視点が前景化した身体離脱ショット」→「語り手視点が背景化した身体離脱ショット」という流れになっている。

した語り」が日本語における自由間接話法に当たるとし、議論を進めよう。

橋本は、第7章で紹介した認知言語学の知見を参考にし、「オーバーラップした語り」で語る場合、書き手の意識自体が物語世界の内部の人物の位置に移動してしまう」(同上:395)と述べているが、完全に重ならず、語り手の存在が明示的に示される例が日本語にもあることも指摘している。

(29) 予感に狂いはなかった。土間につづいた、いりり端の、すすめられた席に腰をおろしたとたん、まわりで雨しぶきのような音がした。ノミの大群だった。だがそんなことで驚く彼ではない。昆虫採集家にはつねに用意がある。服の内側にDDTをふりこみ、露出した部分には、寝る前に防虫クリームをぬりこんでおけばよい。(同上:395)²⁰⁾

(29) に対する橋本の説明は以下のとおりである。

(30) 二重線部分に注目すると、これは明らかに人物「男(彼)」の思考であり、その内面の言葉のように思われる。だが、この部分は同時に直前の部分「だがそんなことで驚く彼ではない」とひと続きで、日本語話者の言語意識では自然なつながりとして読むように思われる。そのつながりの中で、「彼」が言語化されていることに注目したい。人物「彼」の位置に移動しているので、「彼」のパースペクティブから語っているにもかかわらず、その「彼」自身も同じ流れの中で言語化できるのである。これは、語りが完全に「彼」に同化しているのではなく、彼のすぐそば、「背後」といってもいいような位置から語っていることを示している。(同上:395-396)

(29) の一重下線部の解釈については議論の余地があるだろうが、(30) によれば、「彼」の視点からであるにもかかわらず、「彼」と言語化できると述べている。また「背後」という言葉を使っていることから、一重下線部は身体離脱ショット的と言ってよいだろう。したがって、一重下線部は語り手(読者)視点ややや前景化された身体離脱ショットということになる。

しかし、日本語では時制や人称の変化が英語と異なり義務的ではないことから考えると、「オーバーラップした語り」は、時には語り手(読者)視点ややや前景化されることも可能だが、基本的には語り手(読者)視点は背景化されて登場人物視点からの1人称視点と区別が困難な身体離脱ショットと考えられる。あくまで身体離脱ショットと考え、1人称視点とはしない理由は少なくとも3点ある。1つは(29)のように語り手視点が前景化される場合もあり、それと連続的に捉えられること。2つ目は、主に9.1で検討したように、日本語でも語り手と読者の共同注意が残っていると考えられること。そして3つ目として、橋本(同上)が二葉亭四迷『浮雲』の文体変遷を詳細に分析した結果、「もともと主体的に語っていた語りは人物の内面を代行して語ったり、人物の視点から語ったりしていたが、文体改良に伴ってその主体性を隠したその結果として、人物自身が語っているというようにも感じられるようになっていくものの、語りはその主体性を保持しているのであって、抹消したわけではない」(同上:392)と述べていることから、発生論的にも語り手(読者)視点の背景化と考える方がよいと思われるからである。

ただしこれは、例えば本多(2005:155)が、「英語は全知の神のような立場から語りを展開する傾

20) 安部公房『砂の女』より。

向が比較的強いのに対して、日本語は登場人物の立場から語りを展開する傾向が比較的強い」と言っているような従来の言説と矛盾するわけではない。語り手(読者)視点が十分に背景化されれば、登場人物視点が強く前景化されることになるからである。

以上をまとめると、以下のようになる。

(31) 日本語の自由間接話法(オーバーラップした語り)の視点は、語り手(読者)視点が背景化された身体離脱ショットが典型となる。したがって、言語形式的には、登場人物の思考がそのまま反映されやすい。

最後に1点付け加えておくと、自由間接話法内で「私」などの一人称代名詞が使われた場合でも、それは「身体離脱ショット」であり「客観的把握」とは切り離して本稿では考える。この問題は第10章で取り上げる。

9.2.5 まとめ：自由間接話法とは

以上のことから、自由間接話法に関して次のようにまとめることができる。

(32) 自由間接話法：語り手が読者に、ある登場人物に対し注意を向けさせ、さらにその登場人物の「見え」(知覚・思考)に注目させることで読者に登場人物との共感を引き起こさせようとする表現技法。その視点は、語り手(読者)視点と登場人物視点が溶け合った身体離脱ショットであるが、語り手(読者)視点が英語では前景化しやすく、日本語では背景化しやすい。

9.3 自由間接話法とルビ

第9章を終える前に、日本語の自由間接話法について少し補足しておきたい。これまで見てきたように、(29)のようなケースはあるものの、(31)のように、基本的に言語形式上、語り手(読者)視点は反映されないことの方が一般的である。この点は第8章で見た池上による、「日本語は主観的把握を好む」という主張とも整合すると思われる。しかし、日本語独自の特徴を用いて、英語のような「二重の視点」を明示的に表現する手法も存在すると考えられる。それはルビの使用である。出原(2015)では、ライトノベルやマンガでよく見られる、従来の使用法からかなり逸脱したルビ使用を分析し、その結果、本文中の表現と、それに付加されるルビによって、ある表現対象に対して主観的把握と客観的把握の両方を並列的に提示する効果があることを明らかにした。これは自由間接話法だけに限定されるものではなく、また分析はライトノベルを中心に行われたものだが、参考までに自由間接話法的な箇所でのようなルビが用いられているマンガの事例を挙げておこう。



図7 (附田・佐伯『食戟のソーマ』第11巻 p.167)

図7において、下の段の右端のコマで男子に対し共同注意が行われ、真ん中のコマで男子の回想、そして左端のコマで男子の内言が吹き出しなしで語られている点から、このコマのセリフは自由間接話法的と言ってよいだろう。ここで出てくる「美作」とは真ん中のコマの背の高い方の男子の苗字であるが、これに「アイツ」というルビが付加されている。これは出原(同上:92)では「客観的把握の表現に主観的把握のルビ」に該当する例である。これは、その中でも特に事例が多いとされた、ダイクシスが用いられている例でもある²¹⁾。わざわざルビが付加されている以上、登場人物は「みまさか」ではなく「アイツ」と考えていたと想定できるので、本稿の言葉で言えば、「アイツ」は登場人物視点であるのに対し、「美作」は語り手(読者)視点ということになる。その意味では、日本語で明示的に「二重の視点」を表現する1つの手段としてルビの使用があると言えるだろう。

X 今後の視点論の展望 —結びにかえて

以上、自由間接話法の分析にマンガ学の「同一化技法」と「身体離脱ショット」という概念が有効に働くことを見た。同様の概念は心理学や映画論ですでに用いられているものではあるが、映像(動画)ではなく、静止画+文字で表現されるマンガは媒体的に小説に(映画よりも)近い²²⁾と考えられることから、マンガ学の知見を言語学に応用できる可能性の一端を示せたかと思う。

しかし、もし「身体離脱ショット」が自由間接話法の説明にしか用いることができないのであれば、それはただのアドホックな説明となってしまう。そ

こで最後に、マンガ学の視点論を従来の言語学の視点論にどのように組み込むことができるか、またどのような言語分析に有効と見込まれるかを、今後の検討課題として述べておきたい。

第8章ですでに提起しておいたが、人間の認識・解釈の仕方を重視する認知言語学においてさえ、「見え」・視点を考える際には、客観性の呪縛から完全には抜けきれず、現実的にはあり得ない「見え」にはそれほど注意が向けられてこなかった。一方、近年学術的研究が盛んになってきているマンガ学においては、特に竹内(2005)や泉(2008a)などを中心に様々な視点に関する概念が提案され活発に議論されており、出原(2013)ではその一端を紹介し、言語学への応用可能性を示唆した。その中で視点の4分類を提起したが、言語学で軽視されている視点概念について以下のように述べている。

現実的には不可能で、仮想的にしかとれない(逆に言えば、仮想的には取ることができる)視点が言語学では軽視されていた、ということである。具体的に言えば、自分からの視点であるにもかかわらず自分が視界に入っている捉え方(プライヴェート視点[原文ママ]²³⁾)や、全員が同じ視界を共有する(パブリック視点)という「非現実的」ではあるが、マンガには現れる視点が、もし言語現象にも反映されて現れているとしても、従来の言語学では十分な説明ができない、ということである。(同上:84)

「限定知の視点」とは、泉(2008a:32)によれば「全知の視点」が、世界のどこにでも遍在する汎神的な存在であるのに対して、限定知の視点は「個」のキャラクターや場所に宿る守り神か憑依霊のよう

21) 出原(2015:注5)では、マンガでの例として「日曜日」に「あさって」というルビが付加されている例を紹介している。

22) 泉はホームページ上で、マンガでは「背後」であるとは限らないため「身体離脱」という用語を用いたことを明かしている。小説でも、画像自体が存在しないため、「背後」である必

要はない。

23) 「限定知の視点」の誤り。この場を借りて、訂正させていただく。

な存在だとも喩えられ」る視点であるので、本稿で論じた「身体離脱ショット」はこの中に分類してよいと思われる。そして本稿では語り手(読者)視点と登場人物視点という2つの視点が重なり溶け合う視点として考察したが、この2つの視点が同一人物であっても問題はないはずである²⁴⁾。従来の言語学の視点論の言葉で言えば、同一人物の主観的把握と客観的把握が溶け合うということも可能ということである。繰り返しになるが、主観(客観)的把握の主観(客観)とは、基本的に視点の位置や状況への参与に基づく概念であるが、当然ながら、一般的な意味での「主観性」も無関係ではない。例えば池上(2011:58)が、「海は広いな、大きいな。月が昇るし、日が沈む。」という小学校唱歌の一節を取り上げ、「日本語話者はこの表現を〈主観的把握〉に基づく言語化としてつまり、単なる情景描写ではなく、その場にその情景を見て感動している発話者を想定して一読むのであろう。そしてすぐ自ら自身をも同じ場に置いてみて(あるいは、その発話者に自分を同化して)情景に感動しているもう1人の発話者になるのであろう」と述べているように、「見え」と一般的な意味での「主観性」は密接に関係している²⁵⁾。この2つを切り離した上で、関連付けて論じるための理論整備が必要と思われるが、身体離脱ショットはその参考になるかもしれない。身体離脱ショットは、視点位置としては客観的把握であるが、「見え」に伴う「主観性」は主観的把握のと言えるからである。このような視点に基づくことでこれまで区別ができなかった言語現象をより厳密に分析することができるかもしれない。例えば従来、一人称代名詞の有無だけで主観的把握か客観的把握化が決定される傾向があったが、身体離脱ショットであれば自分自身が見えて

いても自身の「見え」と考えることができるので、Traugott(1995)の言う“subjectification”を視点の問題と絡めて論じることが可能になるかもしれない。また上原(2011:77)は「酒が欲しい」と「私は酒が欲しい」を、「見え」としては基本的には同じであるとしているが、後者は身体離脱ショットとして考えることができるかもしれない。

またパブリック視点に関して、泉(2008b:71)は、「誰にでも共有可能なイメージ」を持つことのできる「誰でも視点」と述べているが、これは生態心理学の「観察点の公共性」の発想とかなり近いと考えられる。

一つの観察点はある特定の知覚者に一意的に対応しているわけではなく、任意の知覚者がその位置を占めることができる。(本多2005:18)

このような生態心理学の知見を基に本多は英語の中間構文を詳細に分析し、「中間構文は、文全体としては、探索活動の結果生じる知覚者・行為者にとっての対象の見え(ただし視覚のモダリティに限定されるものではない)を表現している」(同上:93)と説得力のある説明を与えている。これは、池上(2011)の言葉で言えば主観的把握に近いことになるが、一方で中村(2004:48)では、成人の用いる、総称的意味を持つ中間構文はDモードであり、時に子どもが場当たりの用いる、Iモード的な中間構文から脱主体化されることで移行すると述べている。この一見相反する説明は、大人の中間構文を「パブリック視点」からの言語化と解釈することでうまく融合させることができる可能性がある²⁶⁾。パブリック視点は「見え」としては主観的把握であるが、決して個人的なものではなく、他

24) 本論では取り上げなかったが、1人称小説では語り手と登場人物は、厳密に言えば議論の余地があるが、一応同一と考えられる。

25) 宮崎・上野(1985)で取り上げられている「見え先行方略」とも大いに関係がある。

26) 子どもの場当たりの中間構文は泉の用語であれば「プライベート視点」に当たると思われる。出原(2013)を参照。

者と共有できる「客観性」のある「見え」であるからである。

このような「展望」が妥当なのか、またマンガ学の視点論を参考に言語分析に有効な視点論を体系的に構築できるかは今後の課題であり、マンガと言語の間の対応関係を明示的に示すことも求められるが、少なくとも自由間接話法の分析には有効に働くことは示せたのではないかと考える。

参考文献((前)で挙げたものは省く)

- ◎本多啓. 2005.『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- ◎本多啓. 2010.「他者の声を語ること、他者の声で語ること」. KLC発表ハンドアウト.
- ◎出原健一. 2015.「ルビと視点—ライトノベルを中心に—」. 『日本認知言語学会論文集』第15巻. pp.90-99.
- ◎池上嘉彦. 2011.「日本語と主観性・主体性」. 澤田治美編. 『ひつじ意味論講座 主観性と主体性』pp.49-67. ひつじ書房.
- ◎Ikegami, Yoshihiko. 2015. 'Subjective Construal' and 'Objective Construal': A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation. 『認知言語学研究』Vol.1. pp.1-21. 日本認知言語学会.
- ◎泉信行. 2008a.『漫画をめぐる冒険』ピアノ・ファイア・パブリッシング.
- ◎泉信行. 2008b.「キャラたち／キャラクターたち」.『ユリイカ』6月号. pp.67-76.
- ◎メイナード, K. 泉子. 2012.『ライトノベル表現論—会話・創造・遊びのディスコースの考察』. 明治書院.
- ◎宮崎清孝. 1994.「映像メディアでの共感的理解における「背後霊的視点」の効果」『大妻女子大学紀要—家政系—』第30号. pp.161-173.
- ◎宮崎清孝, 上野直樹. 1985.『視点』. 東京大学出版会.
- ◎中村芳久. 2004.「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」. 中村芳久 編. 『認知文法論II』. 大修館書店.

- ◎夏目房之介, 宮本大人, 泉信行. 2008.「マンガにおける視点と主体をめぐる」.『ユリイカ』6月号. pp.52-66.
- ◎岡本雅史. 2004.「ユーザ・インボルブメントに注目した自然なシステム—ユーザ間コミュニケーション環境のデザインに向けて」<人間同士の自然なコミュニケーションを支援する知能メディア技術(研究課題番号:13GS0003)>. 平成15年度科学研究費補助金(学術創成研究(2)) 研究成果報告書. pp.181-188.
- ◎Traugott, Elizabeth C. 1995. Subjectification in Grammaticalization. In Stein, Dieter and Suzan Wright (eds.). *Subjectivity and Subjectivization: Linguistic Perspectives*. Cambridge University Press.

ホームページ

- ◎泉信行.「漫画批評における、視点をめぐる諸問題1〜3」. <http://www1.kcn.ne.jp/~iz-/man/pov01.htm> (URLは1のみ示す)

引用文献

マンガ

- ◎小林尽. 2005.『School Rumble』第8巻. 講談社.
- ◎附田祐斗(原作), 佐伯俊(作画). 2015.『食戟のソーマ』. 集英社.

ライトノベル

- ◎平坂読. 2016.『妹さえいればいい』第5巻. Kindle版. ガガ文庫(小学館).

The Cognitive Processes Involved in Free Indirect Speech

Based on *Manga Studies* (2)

Ken-ichi Idehara

This paper aims to unravel the mystery of the “dual perspective” involved in free indirect speech. The first part of this paper, which was published in *The Annals of Human and Social Sciences*, Vol.23, clarifies the cognitive processes ignited in the discourse around free indirect speech in English (i.e. joint attention). The narrator turns the readers’ attention to a particular character at first and then shows the character’s thoughts by free indirect speech. This second part of the paper first indicates that this is also the case of free indirect speech in Japanese, though Japanese has less tendency of showing explicit cues or indicators because of their propensity of subjective construal. The paper then connects this to the concept of “dual perspective,” where *Shintai-ridatsu shot* (out-of-body shot) is found to be an effective resolution to the problem. The shot, proposed by Izumi(2008a) in the realm of *Manga studies*, is formed by the fusion of subjective construal and objective construal. This shot can solve the mystery of “dual perspective” by regarding free indirect speech as the fusion of narrator’s (and readers’) perspective and the character’s perspective. English tends to foreground the narrator’s perspective, and third person pronouns are used to refer to the character presented within his or her own thoughts. On the other hand, Japanese tends to background the narrator’s perspective, which, on its own, makes it difficult to discern free indirect speech from the character’s thoughts.